

二〇二二年度

群馬県立女子大学 文学部 美学美術史学科

前期入試問題 総合問題

試験時間は、一三時～一四時四〇分までの一〇〇分です。中途退室は認めません。途中で気分の悪くなった場合は、黙って手を挙げて下さい。

問題用紙はこの表紙を含めて十ページ（最後の白紙部分は下書き用）、解答用紙は三枚です。それぞれが配られたら、指示に従って、解答用紙の所定の欄に受験番号と氏名を記入して下さい。試験開始の合図があるまで問題用紙の表紙をめくって問題を見てはいけません。

受験番号と氏名を記入し終えたら、静かに試験の開始を待つて下さい。

問

題

以下の文は、フランス文学者の宇佐美英治が谷崎潤一郎の『陰翳禮讃』いんえいらいざんについて論じたものである。読んで設問に答えなさい。

『陰翳禮讃』(昭和八年)は谷崎潤一郎が目につれるものの色調をどう感じていたかをくわしく伝えてくれる。いったい、『陰翳禮讃』はうっかり読むと、日本の生活様式や日本趣味の礼讃の書だと思われかねない。事実確かに或る程度そのとおりであるのだが、ただこの随筆のすばらしさは、大方の身勝手な礼讃とちがって、表題が示すとおり、日本の旧来の生活にみられる陰翳の尊重を普遍的な見地から讃たえていることにある。そういう観点からいえば、これは随筆というよりは芸術論であり、またその①洞察の深さ、正当さからいって、私は明治以後わが文人の書きえた最高の美術評論ではあるまいかと思う。それにこれは若い読者のために記しておくが、陰翳の翳はカゲではなくカゲリであり、これはもともと蔽おほうという意味である。光に対する影ではない。話は先まわりするが、ハイデッガーは「存在の明るみはただ蔽うことによつて表われる」といった。谷崎潤一郎がこの随筆で終始語っていることも畢竟そのことにほかならない。彼は具体的にこのことを次のように語っている。

われわれの国の伽藍がらんでは建物の上に先ず大きな葺いらかを伏せて、その庇ひさしが作り出す深い広い蔭かげの中へ全体の構造を取り込んでしまう。寺院のみならず、宮殿でも、庶民の住宅でも、外から見て最も眼立つものは、或る場合には瓦葺がき、或る場合には茅葺かやきの大きな屋根と、その庇の下にただよう濃い闇である。(中略)左様にわれわれが住居を営むには、何よりも屋根と云う傘ひらを拈ひげて大地に一廓かくの日かげを落し、その薄暗い陰翳の中に家造りをする。

ついで西洋の家屋と日本の家屋の外観が比較される。パリやその他のヨーロッパの町を歩いたことのある人は、^④次の比喩が、^①いかに的確であるかを思い出されるにちがいない。

日本の屋根を傘とすれば、西洋のそれは帽子でしかない。而も鳥打帽子のように出来るだけ鏢つばを小さくし、日光の直射を近々と軒端に受ける。

そしてやがて美と陰翳の意味が語り出される。

日本人として暗い部屋よりは明るい部屋を便利としたに違いないが、是非なくあなつたのもあろう。が、美と云うものは常に生活の実際から発達するもので、暗い部屋に住むことを^②余儀なくされたわれわれの先祖は、いつしか陰翳のうちに美を発見し、やがては美の目的に添うように陰翳を利用するに至った。事実、日本座敷の美は全く陰翳の濃淡に依よって生れているので、それ以外に何も無い。

彼は素晴らしい、われわれの座敷の無装飾のほの明るさを次のように讃える。

われ等は何処どこまでも、見るからにおぼつかかなげな外光が、黄昏色たそがれの壁の面に取り着いて辛くも余命を保っている、あの繊細な明るさを楽しむ。われ等に取っては此この壁の上の明るさ或あるはほのぐらさが何物の装飾にも優まさるのであり、しみじみと見飽きがしないのである。

さて色調という問題を主に『陰翳禮讃』を読みはじめると、実はいま掲げた屋根と庇、日本の座敷の陰翳について書かれたくだりよりも早く、漆器の色調の深さを述べた、篇中^{へん}でも最も美しい文章に出あう。彼は京都の古い料亭「わらんじや」の暗さについて次のように述べる。

「わらんじや」の座敷と云うのは四畳半ぐらいの小ぢんまりとした茶席であつて、床柱や天井なども黒光りに光っているから、行燈式^{あんどん}の電燈でも勿論暗い感じがする。が、それを一層暗い燭台^{しょくたい}に改めて、その③穗のゆらゆらとまたたく蔭にある膳や椀を視詰^みめしていると、それらの塗り物の沼のような深さと厚みとを持ったつやが、全く今迄^{まで}とは違った魅力を帯び出して来るのを発見する。そして④われわれの祖先がうるしと云う塗料を見出し、それを塗った器物の色沢に愛着を覚えたことの偶然でないのを知るのである。

彼は漆器の真の美しさは「闇」を条件に入れねば考えられず、その肌は《幾重もの「闇」が堆積した色》であるという。そして派手な蒔絵^{まきゑ}を施した蠟塗りの手箱や文台は明るい光のもとではいかにもケバケバしく俗悪に見えることがあるが、一点の燈明^{とうめい}か蠟燭^{ろうそく}のあかりのもとにおくとき、《忽ち^{たちま}そのケバケバしいものが底深く沈んで、渋い、重々しいものになる》ことを注意する。そのつやは《ともし火の穂のゆらめきを映し》、《そぞろに人を瞑想^{めいじやう}に誘い込む》。彼は書く。

もしあの陰鬱な室内に漆器と云うものがなかったなら、蠟燭や燈明の④醸し出す怪しい光りの夢の世界が、その灯のはためきが打っている夜の脈搏^{はく}が、どんなに魅力を減殺されることであろう。まことにそれは、畳の上に幾すじもの小川が流れ、

池水が湛えられている如く、一つの灯影を此処彼処に捉えて、細く、かそけく、ちらちら伝えながら、夜そのものに蒔絵を
したような綾を織り出す。

かねてから、私はなぜ人間が他の金属よりは黄金を尊び、それを跪拝さえるのか、不思議に思ってきた。恐らくそれは人間が闇の中で——涯しれぬ心の闇の中で、真如の光を求めんとする根源的な欲求に発しているのであろう。黄金は暗夜にレクターの役目をするのみならず、地中の光——太陽をおいてただひとつ自ら光る物質——として古来尊ばれて来た。光の中の光である黄金は他の色彩と融けあわず、果して色彩であるかどうかもわからない。黄金が真に映りあうのは闇の色である黒と灰の仄暗さである。黄金を他の色彩、緑や緋色と併置するためにはさらに高度の技術を要するが、それを黒や灰色とともに使うためには非凡な力柄が必要だ。というのもあらゆる色価をさしおき黄金はあまりにも現実的な重さを持ち、片方の皿に黄金をおくと他の方の色の衡りが傾いてしまうからだ。『陰翳禮讃』の主題のひとつは、闇のときめきである黄金の美的な力を見定めることにある。彼はいう。《諸君は又そう云う大きな建物の、奥の奥の部屋へ行くと、もう全く外の光りが届かなくなった暗がりの中にある金襴や金屏風が、幾間を隔てた遠い遠い庭の明りの穂先を捉えて、ぼうつと夢のように照り返しているのを見たことはないか。その照り返しは、夕暮れの地平線のように、あたりの闇へ実に弱々しい金色の明りを投げているのであるが、私は黄金と云うものがあれほど沈痛な美しさを見せる時はないと思う》。

『陰翳禮讃』には、音楽的なヴィジョンによってみちびかれる色合や、触覚の⑤干渉によって起る想像的なものもやいを示すくだりが随処にみられるが、闇に映る黄金のときめきを描いた右の文章はその絶頂を示すものであろう。ここでは最後に次の二節をかかげ、ひとまず本稿を終えることとしよう。

私は、吸い物椀を手に持った時の、掌が受ける汁の重みの感覚と、生あたたかい温味とを何よりも好む。それは生れたての赤ん坊のぷよぷよとした肉体を支えたような感じでもある。(中略)漆器の椀のいいことは、先ずその蓋を取って、口に持つて行く迄の間、暗い奥深い底の方に、容器の色と殆ど違わない液体が音もなく澱んでいるのを眺めた瞬間の気持である。人は、その椀の中の闇に何があるかを見分けることは出来ないが、汁がゆるやかに動揺するのを手の上に感じ、椀の縁がほんのり汗を掻いているので、そこから湯気が立ち昇りつつあることを知り、その湯気が運ぶ匂いに依って口に啣む前にぼんやり味わいを予覚する。……

私は、吸い物椀を前にして、椀が微かに耳の奥へ沁むようにジイと鳴っている、あの遠い虫の音のようなおとを聴きつつ此れから食べる物の味わいに思いをひそめる時、いつも自分が三昧境に惹き入れられるのを覚える。茶人が湯のたぎるおとに尾上の松風を連想しながら無我の境に入ると云うのも、恐らくそれに似た心持なのであろう。日本の料理は食うものでなくて見るものだと云われるが、こう云う場合、私は見るものである以上に瞑想するものであると云おう。そうしてそれは、闇にまたたく蠟燭の灯と漆の器とが合奏する無言の音楽の作用なのである。

恐らく一椀の吸い物の味と色合について誰も潤一郎のこの文章以上に書くことはできまい。

(宇佐美英治「闇・金・灰——谷崎潤一郎の色調」大岡信編『日本の色』朝日新聞社、一九七九年 所収)

※なお表記については現代仮名遣いに改めたところがある。

【設問】

問(1) 傍線部①～⑤の言葉の意味を説明しなさい。(各3点)

問(2) 破線部④について、この比喩を具体的に一〇〇字以内で説明しなさい。(20点)

問(3) 破線部⑥について、われわれの祖先が漆に愛着を覚えたのはどういう理由からだと論じられているのか、二〇〇字以内で説明しなさい。(25点)

問(4) 谷崎の指摘する陰翳の美は私たちの生活の中にまだ残っているのだろうか。それとも消えてしまったのだろうか。この点を明確にしなから「陰翳の美」についてのあなたの考えを八〇〇字以内で述べなさい。(40点)

下書き用紙